

非行と特別支援教育

— 最近の少年犯罪に関する教育臨床的研究 —

生 島 博 之 (愛知教育大学教育実践総合センター)

岩 田 郁 子 (名古屋市立戸笠小学校)

Delinquency and Special Support Education

— Clinical and educational study on the recent juvenile delinquency —

Hiroyuki IKUSHIMA (Center of Research, Training and Guidance in Educational Practice, Aichi University of Education)

Ikuko IWATA (Nagoya City Togasa Elementary School)

要約 本論文は、最近10年間あまりにおける少年犯罪を特別支援教育の観点から研究したものである。豊川主婦殺害事件からスタートし、西鉄高速バス乗っ取り事件、長崎男児殺害事件、佐世保小6同級生殺害事件、寝屋川教師殺人事件、浅草レッサーパンダ殺人事件、等を取り上げ、これらの少年たちが、犯罪に至るまでにどのような学校教育を受けてきたのか、そして、規範意識が育たなかった、あるいは、規範意識が弱過ぎたのは何故なのか等について考察した。その結果、学校が少年犯罪の『舞台』とならないようにするためには、『怨み』を聞く回路づくりができる教師の実践的指導力が不可欠であると同時に、特別支援教育の本格的な実施および性教育の効果的な実践が重要であることが判明した。

Keywords : 非行, アスペルガー症候群, 特別支援教育

1. はじめに

発達障害と非行との関連についてはこれまでにさまざまな報告や研究がなされている。藤川(2007)は、〈特別支援教育の根拠となるもの〉というサブタイトルの中で、2003年の文部科学省の調査結果(通常学級に在籍する小中学生の中に、約6.3%の頻度で、発達障害が疑われる子どもが存在している)と、家庭裁判所が受理した非行少年との面接調査の結果を比較し、「通常学級でのADHDの出現率が2.5%であるのに対して、鑑別所では5.7%であった」「通常学級での自閉症圏の障害(PDDの疑い)の出現率が0.8%であるのに対して、鑑別所では2.8%であった」等と報告し、「非行少年を扱ってきた私が、なぜ特別支援教育について述べるかを説明しましょう。発達障害をもっていると、学級の中では障害のない子どもに比べて扱いにくい、家庭の中でも育てにくい、といったことが起こります。障害に気づかないと、それが、学校の先生の教え方がまずいからだ、とか、親のしつけがなっていない、あるいは愛情不足だ、というように誤解を受けやすいのです。そのまま放置されると、子どもは『困った子ども』『扱いにくい子ども』としてだんだん相手にされなくなってしまうので、不登校やひきこもりの状態になったり、あるいは社会から容認されないような行動に出てしまう、つまり犯罪とか非行と

か、そういった不適切な方向に向かいやすくなるのです」等と説明し、発達障害をかかえた非行少年に対する特別支援教育、特に「対人関係力」を育むことの重要性について説明している。

一方、車谷(2006)は、アスペルガー障害の非行事例(放火、強制わいせつ、等)について研究し、「現代社会の特質とされること—家庭や地域社会の弱体化、あるいは価値の多様化・自己責任に基づく自由化という形で社会規範があいまいになっている状況、そしてインターネットによる情報の氾濫—は、どれもPDDを負う人々にとっては生きづらいものであろう」等と考察している。

神谷(2007)は、山本周五郎の『季節のない町』の登場人物—「電車ばか」と呼ばれて馬鹿にされている六ちゃんなど—の名前を使って事例を紹介し、「受容と共感アプローチのみでは、発達障害を負う人々への援助はできない」「私は日頃から、医療や心理臨床の専門家との協働を心がけ、発達障害のケースだけでなく、希死念慮を持つ依頼者、虐待被害を受けている子ども、拒食などの摂食障害、交通事故や犯罪被害のPTSDを負う依頼者について、専門家と協働して事件にあたっている」等と述べている。

高岡(2007)は、小学生の女の子を誘拐して強制わいせつ事件を起こしたり、小学生の男児をあてもなく

連れ歩いた後、服を脱がせて殺害した男性Aの司法事例を分析し、「Aが何らかの発達障害を有しており、それが情状において重要な位置を占めるにしても、その事実が直接的に犯行に結びつくとはいえない。言い換えるなら、犯行に対する閾値を低下させる他の要因を考察することが、あわせて重要になるのである」等と考察している。

山本ほか(2004)は、反社会行動(自転車窃盗、飲食物の万引、等)を繰り返す青年期アスペルガー障害者の心理アセスメントに関する事例を報告し、「アスペルガー障害者は、何らかの手本の存在や一時的な葛藤やストレスの処理の過程で、突然『婦人用かご付き自転車を盗むという』ことに本人の意識が固着した場合、その固着が中核意思に近づけば近づくほど、『定型』にこだわることによって、『盗む』という意識そのものへの関心が薄らぎ、最終的には、窃盗を惹起した本人自身が何を目的に、どのような手段で窃盗行為をしようとしていたのか自体も不鮮明になる傾向にある」等と考察している。

そこで、本論文においては、発達障害と少年事件の関連について教育臨床的に検討することを目的としているため、まず、1997年以降の主な少年事件を概観すると次のようになる。

- 1997年5月 神戸で中3少年(14歳)が児童を殺傷。
- 1998年1月 栃木県の中学校で中1少年(13歳)が女性教師をナイフで殺害。
- 1999年5月 神奈川県の実業家宅で中2少年(13歳)が母親を包丁で殺害。
- 2000年4月 名古屋市で少年(15歳)が同級生から約5000万円を恐喝。
 - 5月 愛知県豊川市で高3少年(17歳)が主婦を殺害。
 - 5月 西鉄高速バスを乗っ取った佐賀県の無職の少年(17歳)が乗客の主婦を殺害。
 - 6月 岡山県の高3少年(17歳)が野球部の後輩4人を金属バットで殴打。その後、自宅で母親を殺害し自転車で逃亡。
 - 8月 大分県の高1少年(15歳)がサバイバルナイフで隣家6人を殺傷。
- 2001年4月 改正少年法が施行。
 - 4月 浅草で青年(29歳)が成人式を半年後に控えていた一人の女性をナイフで刺殺。
- 2003年7月 長崎市で中1少年(12歳)が4歳男児を大型電器店で誘拐し、4キロ離れた駐車場ビルの屋上から突き落として殺害。
- 2004年6月 佐世保市の小6女児(11歳)が同級生女児をカッターナイフで殺害。
 - 8月 石狩市の高1少年(15歳)が同級生男子の母親を殺害。

- 2005年2月 寝屋川市で少年(17歳)が母校の小学校の教職員3人を殺傷。
- 10月 静岡県的女子高校生が母親に毒物(タリウム)を与える。
- 11月 町田市の高1少年(16歳)が同級生的女子高校生を刺殺。
- 12月 京都府宇治市の学習塾の講師(24歳)が塾生の小6女児を殺害。
- 2006年6月 奈良の高1少年(16歳)が自宅を放火し母子を殺害。
- 2008年4月 大阪府大東市の少年(18歳)が、JR岡山駅のホームで会社員を突き落として殺害。

さて、1997年に神戸で小学生を殺害した少年について、井上(2007)は、「今日に至って精神科医たちのコンセンサスでは、10年前には話題にならなかったこの時の少年Aこそ、アスペルガー障害者の一人であると容認しているのだという」等と述べているが、本論文では、不可解な少年事件の中で、「アスペルガー障害、PDD(広汎性発達障害)、広汎性発達障害特定不能型」と精神鑑定された事件を中心にして識者の見解をながめてみることにしよう。

2. 主な少年事件に関する研究

(1) 豊川主婦殺害事件

事件の概要について、玉井正明・玉井康之(2002)は、「愛知県豊川市、筒井弘さん方で妻(当時65歳)が血だらけで倒れているのを、帰宅した筒井さんが見つけた110番通報した。妻は金づちで殴打された上、包丁で首などを刺されて死亡した。その直前、少年が家から飛び出てきたのを夫が目撃し、格闘したが首などを切られ軽傷を負った。少年は近くの高校の制服であるブレザーを着ていた。『明るく活発、まじめで成績優秀』と近所でも評判のよい高校生が起こした殺人事件に新たな衝撃が広がった。『成績のよい子』が必ずしも『いい子』とは限らないことを実証した事件である。殺人容疑で逮捕された高校3年の少年(同17歳)は、主婦を金づちで数十回殴り、苦しむ声が大きいので包丁で四十数か所も刺すという異様な方法で殺害した。『人を殺す経験をしてみたかった』と供述しており、明確な動機の見えない殺人である。被害者宅に侵入したのはまったくの偶然で、『たまたま通りかかった家の玄関が少し空いていたから』で、『若い未来のある人はいけないと思い、表札の名前を見て年寄りだと思った』と話している。最寄りの駅まで逃走した後、公衆トイレで一夜を明かし、翌日、交番に1人で自首した。自首の理由について、『寒くて疲れた』

と話し、反省の言葉はなく動揺の様子もみられなかった」と説明し、少年が、1歳半の時に中学教師の父親が離婚し、その後、父方祖父母と4人で暮らし、祖母を「お母さん」と呼んで育てており、祖父も元教師であった等の家庭状況を報告している。

そして、本事件の動機と背景について、①殺人願望とこだわり傾向（少年はかねてから人の死に関心があり、『不老不死薬』の開発を考えていたが、成功の見込みがなく、殺人を選んだ）、②神戸児童連続殺傷事件との共通性、③自己実現を求めた動機なき殺人（祖父母の呪縛を解くための反抗が外部の老人に向けられた）、④少年の明るい性格は、敵意を抑圧して『いい子』を演じてきたことのあらわれ（反動形成）、⑤挫折感（学力の片寄りのために第1志望の高校に入れず大学入試も同じ轍を踏むことが予想されたことで、強い挫折感にさいなまれていた）、⑥事件の数日前に、高校のテニス部を退部し、心に空白が生じたこと（少年は部活に打ち込むことでパターン化した行動様式を持っていた）、等と考察している。

町澤（2000）は、少年の生い立ちを分析して、『復讐』という視点で事件をとらえ、「父親や祖父に対して、怒りが爆発したのです。では、なぜ殺人という暴力が何のゆかりもない他者に向かい、肝心の父や祖父に向かわなかったのでしょうか？父や祖父を殺してしまえば、父や祖父は少年のことで恥や汚名を負うこともなく、苦勞することはありません。死んでしまったら、それで『終わり』です。それでは、少年の心は満足できないのです。父や祖父は、少年が他者を殺すことで、『この家の子がこんな悪いことをした』という『最大の屈辱』を受けることになるのです。事件の背景には、少年の父と祖父への復讐の思いがありました。同様に、いかなる理由があれ自分を見棄ててしまった生母への『復讐』の思いもまた、少年の内部で渦巻いていたに違いありません」等と考察している。

小此木（2000）は、小年が精神鑑定で『純粹殺人』と診断されたことについて、「つまりそれは、殺人をしたいから殺してみたかった。あるいは、人を刺すとどんなふうになるかを知りたかったための殺人だという意味である」と解説し、「人が肉体を持ち、刺せば血が出たり、痛みにもがき、苦しんだりするのはごく自然の現実なのだが、そうした現実をいまの日本社会の日常の暮らしの中で実際に体験することはむずかしい。実際には誰もが肉食しているにもかかわらず、にわとりや牛や豚と直接触れ合う暮らしは、なくなってしまう」等と、人工環境の中に引きこもって暮らすわれわれの日常生活を指摘し、「いま、自然を失った人工環境の中で生まれ育った若者たちに、自然と身体の直接の出会いを希求する気持ちがひそかに高まっている。その最も深刻な体験は、『手首切り症候

群』だ。『私、手首を切って出血させて、傷の痛みをいつもいつも我慢していると、自分が生きているという実感を持つことができるんです。どこの生活にもそういう実感を持てるような体験がなくて』と言う。彼女の左手首には、命の証しのように、いつもしっかり純白の包帯が巻かれている」「現代社会の少年たちの心の中に突如あらわれる激しい攻撃性、人を殺してみたいといった衝動は、何やら、生き物の肉を食べないと元気を失ってしまう野生動物が、突然、拘禁動物化した人間の心の中にたちあられるかのようだ。いまのわれわれは、この動物園の拘禁動物と似たような暮らしをする身の上である。そして、自然との闘いの中で得られる身体的な自然感覚があまりにも希薄になった」等と考察している。

ところで、少年の精神鑑定の結果は、「執着心と共感性の不足を特徴とする高機能広汎性発達障害（アスペルガー症候群）」として報道されたため、発達障害への偏見や差別を危惧した門（2001）は、朝日新聞の『論壇』で、「ここで確認しておきたいことは、アスペルガー症候群の人の大部分が犯罪とは無縁だということである。それは、健常者の大部分が犯罪とは無縁であるのと同様である。むしろ、アスペルガー症候群の子どもは、学校でいじめの標的にされやすく、加害者よりも被害者になることの方が圧倒的に多い。いじめられて情緒不安定になり、その結果攻撃的になることはありうる。しかし、適切な教育と支援があれば、対人関係やコミュニケーションの面で力をつけることができ、充実した生活を送り、高等教育を受け、就職し、友人をつくることもできる。そのためには、家族や教師をはじめ周囲の人たちがアスペルガー症候群について正しく理解することがまず必要となる」と述べると同時に、児童青年精神科医の養成に厚生労働省や文部科学省が力を入れるように提言している。

（2）西鉄高速バス乗っ取り事件

事件の概要について、玉井正明・玉井康之（2002）は、「西鉄高速バス乗っ取り事件はゴールデンウィークの最中（豊川市主婦刺殺事件の2日後）に起きた。九州自動車道・太宰府インターチェンジ手前で、刃物をもった少年（当時17歳）が、乗客と運転手計22人乗りの佐賀発福岡行き<わかす号>を乗っ取った。バスは中国自動車道を経て山口圏内で山陽自動車道に入り、少年はこの間に、女性3人を死傷させたほか、乗客3人が脱出する際などに負傷した。少年は事件当日の午前9時ごろ、父親と入院中の病院を出て同9時50分ごろ帰宅し、昼前に弁当を持って自転車から家を出た。バスの発車は、午後0時56分で、凶器の肉切り包丁は乗車前に購入した。全長約40センチメートル刃渡り30センチメートルにおよぶ大型で高価なもの（1万

4000円)である。少年はバスを乗った後『言うことを聞かないと殺す』と脅して人質の乗客を後方に移動させた。しかし、眠っていて事態に気付くのが遅れた東京都の女性(同34歳)に『ふてくされていますね』と言いながら首や背中を刺して重傷を負わせた。同2時45分ごろ、女性の乗客がトイレを理由にバスを脱出したことに激高し、佐賀市の女性(同50歳)の首や両手首を数回にわたって刺した。約50分後、中国自動車道小郡インターチェンジ(山口県)付近を走行中、女性の乗客が左側の窓から脱出すると、少年は開いた窓近くの座席にいた塚本達子(同68歳)に近づき『ここに誰かいたらどう』と叫び、首などを刺した。中国自動車道下松サービスエリア(山口県)にさしかかった同4時20分ごろスピードを落としたバスの左最後部の窓から男性客が飛び降りたため、少年が再び激高、倒れていた塚本達子さんの首などを何度も刺して殺害した。後の2人はいずれもほかの乗客が脱出したため『見せしめだ』『連帯責任だ』などといって切りつけられた。男性客が途中で解放された後、最後までバスに乗ったのは、一人旅の女兒(同6歳)を含む女性9人と運転手であった」と説明し、少年の生い立ちについて、「高校受験が押し迫った2月18日、同級生に校舎2階の非常階段から『飛んでみろ』と言われてたためらっていた。しかし、取り上げられた筆箱を『返してほしかったら飛べ』と催促されて実行した。少年は、着地時に足を滑らし、腰椎損傷という大怪我で2週間ほど入院した。高校の入学試験は病室で受け卒業式にも出席できなかった。入学した私立には、9日間だけの登校で5月末に自主退学し大検で進学を目指していた。高校に行かなくなってから事件を起こすまでの約2年間は、自室に引きこもり昼夜逆転の生活をしていった。よく飼う犬を叩き家庭内暴力がエスカレートしていった。父親には名古屋・大阪などへの日帰りドライブを頻繁に強要した。両親は少年の希望もあり、なにかの弾みになればと思い、パソコンを買い与えた。以後、2月末ごろからは鍵をかけて、自室に閉じこもりメール、インターネットに熱中し、言動等から危険を感じるようになった」等と補足し、事件の動機と背景について、①心に深い傷を負った体験を無意識に繰り返そうとした「反復強迫」、②インターネットを通じて、反社会性の徴候を増幅させたこと(ネットの通信販売でナイフを購入、同世代の少年が起こした凶悪事件に強い関心をいただいた、他)、③豊川市主婦刺殺事件に触発された、④挫折感(志望校には入学できず中退して部屋に引きこもる)、⑤学校で「いじめ」を受けたことが事件の動機の根底にある(当初は母校への籠城を想定しており、「校舎の1階から各教室で生徒を刺し3階の教室に立てこもって注目を浴びたら、飛び降りて死ぬつもりであった」と話している)、⑥存在感のアピール(「派手なことをして社会に自分

をアピールしたかった)、⑦不満のターゲットが学校から親に向けられた(両親によって入院させられた少年は、事件後に『親に裏切られた』と供述している))等と考察している。

町澤(2000)は、「彼らはもはや自分のレゾン・デートル(存在価値)がまったくなくなったと感じた時ブラック・ヒーローへの道を踏み出します。どうせ、『表の世界』では輝かしい人生なんか得られない。ならば、犯罪的な世界、暗い闇の世界で皆があつと驚くような事件を起こし、日本中が注目するブラック・ヒーローになってやろうという傾向が若者たちにあり、実際それが事件として表面化しているのです。彼らが殺人を犯す理由の根っ子に、歪んだ自己愛と自尊心が横たわっていることを見過ごしにすることはできません」「彼ら孤立した犯罪予備軍の人たちは、人間を『モノ化』して見ます。それは動物虐待、動物殺しにつながっていきます。多くの少年犯罪の殺害者たちは、人を殺す前に、先行してペットを殺しています。酒鬼薔薇聖斗、京都小学生殺害事件の『てるくはのる』の青年、大分の一家虐殺の少年も、ペット殺しが先行しています」と考察し、『ブラック・ヒーロー』が伝染していく根拠として、「No5. 京都で大根が切れ、沼津で淫売女が切れ、そして!! 豊川で老いぼれ女郎が切れ殺されたとか。すばらしい!! しかも僕と同一歳の17歳とか…? よい風潮だ。40ヶ所も女郎を刺した時の快感どうだった!? 真面目に生きるよりはるかにいいだろう!? 僕も今日実行する。これはわが計画をぶち壊した復讐だ!! 20, 21ぐらいの女がいい、強姦した後、首しめて殺す、理想だ!! 2つの快感を味わえる」等の同少年の日記や、『キャットキラー』や『ネオむぎ茶』と名乗っての発信内容や、「福岡に『こどもの王国』を作り、自分はその王様になる」という妄言、等を分析している。

月崎(2001)は、両親の手記を分析し、「親が少年を心配し、先回りをして、何かを決めてしまう様子が感じられる」等と、親の過干渉を問題にしている。

藤井(2000)は、少年の家が、『次郎物語』を書いた下村湖人がしばらく暮らした家から徒歩3分のところにあり、元は古くからの料亭であり、加害者宅の周辺住民が、家から少年の妹の悲鳴がするのを聞いたり、少年が飼っている犬を蹴り上げたりしている姿を目撃していたこと等を報告し、学校で起こったいじめを非難する母親と学校側の言い分の食い違いについて考察している。

小此木(2000)は、「実は、この少年たちの主観的な思い込みの背景には、多くの場合、『インターネットへの引きこもり』がある。バスジャックの少年は、インターネットのチャット(おしゃべり)の中での喧嘩や争いによって発揮していた破壊性を、現実の世界の中で発揮してしまった。この現実と仮装現実の境界

の破綻が、あの事件の心理的なメカニズムである」等と考察し、インターネットの魅力として、①匿名で別人格になれる、②「全知全能な自分」を感じられる、③自分の気持ちを純粹に相手に伝えられる、④特定のひとと、親密な一体感がもてる、⑤イヤになったら、いつでもやめられる、等をあげ、この魅力のために、インターネット依存症－インターネット狂－になる危険を指摘し、「遊び」が「狂」に変わるプロセスを分析している。

(3) 長崎男児殺害事件

事件の概要について、柿沼・永野（2005）は、「2003年7月1日、午後7時過ぎ、長崎市三芳町の大家電量販店で家族4人で買い物をして同市北陽町の会社員種元毅さんの長男Sちゃんが、両親と離れた10分ほどの間に行方不明になった。午後8時過ぎ父親から『子どもがいなくなった』と警察に110番通報がなされた。翌2日、午前9時45分ころ、南へ約4キロメートル離れた同市万才町の8階建て立体駐車場のビルと塀との間の地面で、Sちゃんが頭から血を流して死んでいるのが発見された。全裸で体には複数の打撲跡があり、着衣は遺体のそばに置かれていた。屋上から落とされ、頭を強く打ったことによる転落死だった」「7月9日にこの事件の容疑者として12才の中学生が補導された。この少年は以前から幼児に性的いたずらを繰り返していた。Sちゃんを誘拐し、暴行を加えた際、現場の防犯カメラに気付き動転。衝動的にSちゃんを駐車場の屋上から投げ落とした。その際、脱がせた衣類を持って自分も落ちた地点まで降りて行き確認している。犯人が12才の少年であったこと、犯行が残忍であったことなどから、1997年に起きた神戸の事件と重ね合わせて世間では大きな驚きとなった」と説明し、鑑定の結果（「少年は、他人の心情を思いやる対人的共感性が乏しい。コミュニケーションが相互的でない。男性性器に異常にこだわる等の特徴があり、発達障害の一種と診断。障害が非行に影響していることは確かだが、障害そのものが直接非行に結びつくものではない」）を踏まえ、「教育関係者は、中学生が、あのような残虐な事件を起こしたことに『まさか』と驚いた。改めて心の教育の在り方が問われる。補導された少年は、中学校での成績はトップクラスでおとなしい性格である。評判は良く、平素の様子からは残虐性はうかがえないという。しかし、このような衝撃的な事件の前には、なんらかのサインや兆候が見られるものである。周りの大人たちには、子どもが送るわずかなサインや兆候を見逃さず、適切な支援ができる力が求められる。家庭裁判所の審判では、広汎性発達障害があるとされた。幼少期から、周りとの意思疎通に難しさがあながらも、家庭と学校が問題を共

有せず、少年の発達障害に応じた指導に当たれなかったことを指摘している。二度とこのような不幸な事件を繰り返さないために、家庭や学校には、関係専門機関との連携を図りながら、発達障害に関する理解と発達障害のある子どものニーズに応じた適切な指導と支援が早急に求められる」等と述べている。

一方、山中（2003）は、この事件と豊川主婦殺害事件などと関連づけながら、「従来の規範でなくて、新しい規範を子どもたちの中から見いだすような教育を可能にしなければいけない。例えば親たち。悪いのはみんな他者だとおもっているから『学校が悪い』『社会が悪い』と言う。そこに異を唱えたい。悪は自分の心の中にある。自分の中の悪と、他者の中の悪を最小にしてどう付き合うか。今起こっている事件はおかしいと感じる人が多いでしょうが、自分は関係ないと思っているからだめなんです。いつ、自分が被害に遭うか分からないのだし、気が付いたら加害者の側に立っているかも分からない時代。そのことを考えるべきです」等と提言している。

芹沢（2007）は、「この少年の場合、学校的な価値観からすれば文句のつけようのない『いい子』だったようです。勉強はよくできるし、テストの成績でも、学年で一桁に入っていた。服装や髪型に乱れがない。髪を染めているわけでもないし、服装もきちんとしている。それに挨拶もできる、これらが三つ揃うと文句のつけようがない。他人からすれば羨ましいような子どもです。つまり、そういういい子への追い上げがあった。でも、その内側では、『させられ体験』が飽和状態になっていて、自分を感じられない。いい子にはなってみただけれど、『いい子のニヒリズム』のような内面の状況がある。それこそ、『ぼくの本当の自分はどこにあるの?』という問いかけを、おそらくしたかったのではないか」等と述べている。

また、福島（2005）は、「少年は、事件の量販店の周辺で幼児に性的いたずらを繰り返す<小児性愛者>であった。少年の住むマンションの管理組合は、子どもに対するいたずらが頻発するので、エレベーター内に防犯ビデオを設置したが、そのビデオに少年の姿が記録されていた。また、少年の供述では、『前に知らないお兄ちゃんから性器をいじられるなど小児性愛的な行為を受け』『それから、自分も小さい子どもにするようになった』また、『男児の性器がなくなったらどうなるか－女になるのかどうか－を知りたくなり、今回の事件を起こした』という」「後に週刊誌に流失した警察調書によると、少年は幼少時から動物虐待を繰り返していたという」と報告し、「12歳の小児性愛者が起こした誘拐殺人は、日本全国に大きな驚きと衝撃を与えたが、この事件は、次のような二つの要因によって起こったものと考えられる」「第1は現代日本の少年少女を囲む性的状況であり、そこでは少年

少女に対する性教育は学校でも親によるものもほとんどない。また、社会が提供する性情報・性表現という広義の性教育も、一見すると現代社会には性情報・性表現が氾濫しているように見えるにもかかわらず、子どもの性意識・性知識の形成には必要不可欠な枢要部分が欠落している。その背景には、少年少女の性行動を抑圧する無言の掟が強固に存在する」「第2はこの時代はさまざまな発達障害の有病率が上昇している時代である。少年の心理的発達の特異性であるが、これには、＜性倒錯＞と＜アスペルガー障害＞という二つの面があるので、これを＜個人的な特異な体質＞と呼んでおこう。この中で、一方のアスペルガー障害は生まれつきのものであり、他方の性倒錯はおそらく生い育ちの問題から生じたものであろう。後者の背景には、両親の夫婦関係の問題とか、母子間のアタッチメントの絆の欠乏、小児性愛の被害体験などがあると考えられる」とし、「この事件は、普遍的な状況と個人的な特異性が、あたかも鍵と鍵穴のように合致してしまった結果、パンドラの箱が開いてしまったものである。すなわち、このような性の抑圧の強い社会の中で、性知識に飢えたアスペルガー障害児がこの状況と資質との競合の結果、性器に対する強迫的観念の虜になり、アスペルガー障害の中核症状である特定のモノ・コトに対する固執性にも支配されて、同症に特徴的な、いわゆる＜科学実験型＞非行を志したものである。あるいは、＜疑問検証と確認の行動化＞を起こしたものである」と述べている。等と述べてたり、「少年は誘拐した幼児を＜去勢＞しようとしたようだが、これは彼自身の＜去勢不安＞が被害者に転位されたものと考えられる」と、精神分析の観点から考察している。

なお、最後に小児性愛に関する論文を少し紹介しておく。ウッズ (2003) は、パニック発作を主訴とする29歳の青年Dの精神分析療法を紹介し、「Dは性的コンプレックスが強く、自分の身体を嫌悪し蔑視した。面接過程を通じて明らかになったのは、彼の小児性愛には、少年から理想化された身体を盗み出すという意味があることだった。また、Dの狙いは、異性愛の少年に強い性的快感を与えて、女性との関係に失望させることにあった」「Dは同性愛に否定的だったが、それは同性愛を女性化と混同していて、自分の男性性を失う恐れがあったからだ」等と考察している。

(4) 佐世保小6同級生殺害事件

事件の概要について、柿沼・長野 (2005) は、「2004年6月1日 長崎県・佐世保小学校で、給食の時間に、小学6年生の女児が同級生の女児を刺殺するという事件がおきた。加害者の女児は、これまでに非行歴はなく、むしろ勉学にもバスケットボール部の活動にも熱意をもって取り組んでいた小学生であった」

「長崎県では、近年、公立の中学校・高校一貫校が設置されるなど『教育改革』がすすめられてきた。それによって、これまで受験競争と縁遠かった小学生にまで、受験競争がもちこまれたのである」等と説明し、「同小学校では、前年度にこの県立中高一貫校を20人近く受験したにもかかわらず合格者はなく、今年度も6年担任となった教諭には『今年こそ合格者を』との無言の圧力がかかっていた可能性は否定できない。そのうえ、事件のあった大久保小学校は、1学年1学級でクラス替えはなく、新担任は、前年の5年のときに『学級崩壊状態』とされたクラスの担任を引き受ける希望者がいないなかで、引き受けざるをえなかったのである」等と述べている。

また、事件にいたる経過について、「加害児童は、5年生の3学期に、好きだったミニバスケットボール部を辞めることになるが、この点について、長崎県教育委員会の最終報告書では、加害少女の親は、加害児童がミニバスケットボール部をすることを快く思っておらず、『2学期の成績が下がったら（加害児童がミニバスケットボール部を）やめさせられる。だから通知表の評価を下げないで』と周りの児童が（担任に）言っていた。12月頃退部したようで、その後、試合に出たことがあったようで、親の意向で仕方なくやめたと思う。（一度やめて、再び試合に出たのは）親に言っていないかもしれないとし、家庭訪問の際の印象として『父親が一人に対応し、母親は控え気味』『父親の加害児童への期待は大きく』『家庭の方針として、成績の向上を重視していた』としている」等と説明し、前述の最終報告書に、「成績の変化に関する情報が親に与えた影響は、極めて重要だと思う。聴取の結果、加害児童の成績の変化は、担任の評価の仕方の違いによるものということであったが、親や子どもにはそのことは分からない。加害児童は、同じように努力しているのに、結果として、ミニバスケットボール部をやめさせられたとしたら、本人が納得しないまま、罰を受けたことになる。このことは、『解離状態』を病理的状況へと進行させる要因として重要だ」等と記載されていることを紹介している。

一方、福島 (2005) は、「このころの少女は、授業中に自分の頭を突然、壁に打ちつけるなどの衝動行為があったという。さらに、少女に生理がはじまったのは、殺人事件の1週間前のこのころだった。31日には、少女は、『運動会で転んで、両肘、両膝をすりむき、骨盤を打って腫れた』と（ホームページに）書き込まれている。このトラウマは、運動会で実際にあったことなのか、おんぶ遊びで背負った重大な＜心理的トラウマ＞を、象徴的な形で告白したものなのか」「実際の少女は、目鼻立ちのはっきりした可愛い子だったというが、自分では『中肉中背』で、『ダイエットする。絶対にやせる』と宣言していたから、思春期の多

くの少女と同じように、理想の体型や体重と自己像とは一致していなかった。このように、思春期の少女が、自分の身体像、特に体重や肥満に過敏になっている時に起こったのが、おんぶ遊びの中で起こったささいともいえる『事件』であった。Rちゃんが少女を背負って、ふざけて『重い』、と言って少女を投げ出したのである（5月27日）これに対して、Rちゃんに少女は『失礼ね、やめて』と言い、その『暴言』の謝罪を求めたが、聞き入れられなかった」と説明し、親に甘えておんぶや抱っこをしてもらえず淋しい思いをしていたことや思春期の同性愛的感情、等に焦点をあて、「私は、少年事件ではあるが、何例かの親友殺人事件の精神鑑定を担当して、『仲がよい友だちの方が、仲が疎遠な友だちより殺されやすい』という不思議な現象に直面したことが多い。『親しい仲には殺しあり』という現象は、その『仲がよい』という関係が、ただの友情でなく＜思春期の同性愛的感情＞と呼ばれる一種独特の心理を醸成しているからである。その心理の中には、思春期の心理的な大変動の中で必死になって自我同一性を模索し、親友という写し鏡の中に、自分の有能な姿を確認したい、自分の存在が『取るに足る何ものかである』ことを確認したいという強い欲求を投影しているからである。意識の深層に、そのような＜思春期の同性愛的感情＞を一少女自身すら意識していなかったかも知れないが一秘めていればこそ、おんぶ遊びの一件のようなささいなきっかけが、自分の全存在が否定されるような言葉や行動として彼女の自尊感情を傷つけ、被害児に対する甘い期待を断ち切るものとして、11歳の少女を親友殺害に駆り立てることを可能にするのである」等と述べている。

また、高岡（2004）は、「どんな子どもであっても閉塞した集団（学校がそうです）の中では、加害者としてであれ被害者としてであれ、必ず死と背中合わせになるということです。そして、それが現実の死へと至らないためには、集団からの離脱が保障されているか、あるいは、子どもを集団の外から支える複数の手が必要になる」と述べている。

（5）寝屋川教師殺人事件

事件の概要について、矢幡（2006）は、「2005年2月、大阪府寝屋川市で、当時17歳の少年が小学校の教職員3人を殺傷した。少年は、遠方で購入した包丁を2本用意し、母校の小学校を訪れた。インターホンで自分が小学6年のときの担任の在籍を確認し、不在であることが判明する。しかし卒業生ということで校内立ち入りを希望し、案内にきた教師を背後から刺して殺害、さらに2階の職員室に行って、女性教職員ふたりに斬りつけて負傷させた。包丁の刃渡りが長かったことや予備の包丁も準備していたことから、強い殺意

があったと考えられる。最初の精神鑑定では、少年はアスペルガー症候群という診断が下されている。だが、この診断名は、下手をすれば、いかようにも当てはめることのできる便利箱的な使いかたをされかねない分類である。『受け答えに不自然さは感じられない』とする弁護士の感想もある。現在、検察側が再度の精神鑑定を請求するという異例の展開となっており、最終的に診断に決着がついたとはいいがたい」等と説明し、「少年には、ミロンが述べているように、『自分は社会から不当な目にあわされてきた』という強い不満があった。取り調べで、少年が自分自身の性格にコメントして、『被害意識が強い』『服装や身長の話になると、友人に嘲笑されている気がした』と言い、不登校についても『容姿などでいじめられるのではないかと思います、学校に行くのをやめた。行かなくなると学校そのものが怖くなった』（毎日新聞3月2日号）と述べているという。少年のパソコンからは、事件の1年ほど前から、少年犯罪や少年法に関する情報に頻繁にアクセスした形跡が見つかり、バイクの免許をとって運転中事故を起こしたり、突然髪を染めたりするなど、行動の変化が見られた」「また、新聞報道などによれば、少年は酒鬼薔薇こと少年Aの実家などを訪れていたといわれている。少年の内面には、過剰な攻撃性や大犯罪者への憧れが渦巻いていたと考えられる」等と述べている。

一方、尾崎（2007）は、「この少年は『小学校時代いじめられていて、その復讐のために来校した』と動機を語っている。アスペルガーを知らない人は、『そんなに時間が経ってから復讐？』と理解に苦しむかもしれない。けれども、アスペルガーを知る人なら、彼がいまだに小学校時代の記憶に悩まされていたのかもしれないという仮説は、容易に考えられるだろう。彼の心の傷の深さを知り、ケアする人との出会いがあれば、最悪の事態は食い止められたかもしれないのだ。この事件から学べるように、どのような些細ないじめであれ、当事者にとっては人生を変えてしまう出来事になりうる。残念なことだが、発達障害の子どもへのいじめは、うつや強迫神経症や不登校などの二次的な障害から顕在化し、発覚することが多いのだ」等と述べている。

また、佐藤（2007）は、この事件の背景として、①いじめ、②家庭の状況、③失恋と『うつろな気分』、④不可解な行動や加害妄想、等を指摘している。まず、①いじめについては、「2年生。この2年生のときがもっとも辛かった、と本人は述べている。同級生から『おかま』というあだ名をつけられ、集団で『おかま、おかま』とバカにされたり叩かれたりした。教室の後ろでズボンが脱がされたこともある。担任教師に訴えたが、取り合ってくれなかった。その後は、もう二度と担任には言わなかった」「5年生。『出っ歯

『どぶねずみ』などと呼ばれ、クラス全員からのけ者にされていると感じていた」「6年生。Nとはけんかばかりしていた。S教諭が『距離を取ったらどうか』とアドバイスしたので、翌日Nからのトランプの誘いを断った。するとNは自分以外の友達とトランプをするようになり、のけ者になってしまった。給食のときにもNのグループには入れてもらえず、あちこちの席を転々と移って食べた。全員にドッジボールが配られたが、自分のボールはカッターで傷つけられていた。また、こんなこともあった。S教諭が他の子を叱っているとき、口笛をふいた。教諭が怒り、いすに座っていた自分を突き飛ばした。机に突っ伏して泣いていると、S教諭が謝罪した」「中学1・2年、不登校となる。1年生の部活のときHからテニスボールをわざとぶつけられるようになった。2年生では、自分の椅子に画鋸が置かれたことが2回あり、2回とも気づかないで座ってしまった。Kがニヤニヤして自分の方を見ていた」と報告している。

次に、②家庭の状況については、「4年生。この時期、姉が重篤な摂食障害となり、両親はその対応に追われた。そのため、『両親は被告人の不登校の具体的な状況を、詳細には記憶していない』という。家の中で姉が暴れ、たいへんな状態だったのを少年も覚えている」「本人によれば、不登校の理由は、いじめなどによって登校が辛かったからでなく、拒食症の姉が学校を休むのを見て、自分も休んでよいと思いついたことが理由だという。またこの頃、部屋に盗聴機や盗撮機が隠されているのではないかと考えることがあった」と報告している。

さらに③失恋と『うつろな気分』については、「2005年1月4日。Aさんの『恋愛妄想』をした。27日。病院で知り合った女性（Aさん）と外で会ったが、自分が美化しすぎていたためか、がっかりした。病院外でできる友だちがほしいと改めて感じた。31日。突然『うつろな気分』になった。今までの解釈や価値観がすべて崩れてしまうような、奇妙で空虚な気分だった。2月9日。Aさんより、誕生日にあげた帽子をかぶった写真つきのメールが送られてきた。驚いたがうれしかった。一度はあきらめようとしたのに、またAさんへの気持ちが戻ってしまった。しかし満たされない思いも強く残った。11日。5、6時間、Aさんの『恋愛妄想』した。やはりあきらめなくてはいけないと思い、Aさんのメールアドレスと写真を削除した。午後から気分が落ち込み犯罪妄想と破滅的思念が湧いた」「事件当日も、『うつろな気分』の中で、Aさんの恋愛妄想をしている。ホームページを開き、自分とまったく別の世界で楽しそうに生きていて、自分が関わることはできないと強く感じている。そのあと少年は、姉からももらったチョコを食べたというが、『S先生、刺す』という言葉が浮かんだのがなぜの

さなかだったのか。断るまでもなく事件が起きた2月14日はバレンタインデーであり、チョコをくれたのはAさんではなかった」と報告している。

最後に、④不可解な行動については、「その時、職員室には少年が残っていた。少年が見せたのは、きわめて不可解な行動だった。そばにあったトランジスタ・メガホンを手にし、『皇居に向かって敬礼』と言ったり、『みんなで広げようやさしさの輪。アホか、バカか』『先天的に猟奇的の徒』などと口にしたりしている。そして窓のブラインドを下ろしたところで、やってきた養護学級の児童送迎バスの運転職員と向かい合った。それから少年はメガホンを置き、タバコを吸い始めている。パトカーの到着に気づいたときには、『ポリが来た』とひと言、呟いたという」「(予備校生の頃) 京都の新京極で、夜、サラリーマンが言い合いをしているところに近づいて行き、『エキサイト!』と大声で言って、喧嘩していた両方から怒られた。アメリカ村を歩いているとき、交番に入って、『革命を起こしに来ました。宅間より人を殺せます』などと言って、つまみ出されたこともあった」等を報告し、少年の気になる行動や加害妄想については、「6年生の頃、部屋の壁の押しピンの痕が気にならず、壁紙を削って、穴をふさいだ。夜、寝ていると外の物音が気になってたまらなくなり、夜中に起き出しては外の様子を覗き見ていた。雨戸の隙間から隠しカメラを入れているのではないかと不安でたまらなくなったこともある。『叔父に、性的な興味をもたれていると思った』と公判で供述しているが、真偽はさだかではない」「12月ころから、2チャンネルにはまり込んでいった。2チャンネルを通じてもっとも衝撃的だったのは、『裏社会』の存在を知ったことだ。ある宗教団体や公安警察が裏社会でこんなに暗躍している、金持ちや権力者が人を殺すのを見て喜ぶショーのようなものがある、などということが書き込まれていた。人身売買や拷問などの記事もあり、裏社会のことを自分も知ってしまったから、拷問されて殺されるのではないかと怖くてならなかった。掲示板に毎日新しい書き込みがなされていて、恐怖心をなだめるために毎日チェックしなければならず、どんどん深みにはまっていった」「中学3年生。インターネットへの惑溺は、死、死体、殺人、犯罪といった世界へ導いていった。自殺したいと考え、完全自殺マニュアルを購入したり、猟奇的サイトをネット・サーフして『チェチェンの首切り』という動画にたどり着いて、それを見たりした。被害妄想的な恐怖心はあい変わらず強く、自宅の裏の神社が不良の溜り場のようになっていて、その不良たちにひどく怯えていた。小中学校で知っていた人間も入っていたように見え、姉がレイプされるのではないかと、お年玉を狙ってかつあげされるのではないかと、それをきっかけに『たかり』にあ

い、次から次へとお金をせびり取られてしまうのではないか。そう考えると怖くて、蒲団をかぶって怯えていた」「加害空想もこのころから現れはじめていた。これまで自分をいじめたりバカにした人物を、残虐に殺していった。不特定の人物に対する空想も湧き起こり、第2回公判では、『中学校の卒業式では、体育館にみんな並んでいますね。2階が吹き抜けになっていると思うのですが、2階から刃物が大量に入った箱をぶちまけるということを考えました』と述べた」「警察官をボウガンで撃ってピストルを奪い、ピストルを乱射するとか、自分をいじめた友人の家で待ち伏せし、殺してしまうという『妄想』をした」等と報告している。

そして、これらの調査結果を踏まえ、佐藤（2007）は、「特別支援教育ということで始まった新しいスタイルの学校教育が、これからどうなっていくことが望ましいのか、そうした意味でも、学校関係者がこの事件から学ばなければならないことはたくさんあると思います。小中学校にうまく適応できず、適切なサポートも得られなかった少年がたどり着いてしまった痛ましい帰結、という側面は、この事件に間違いなくあるわけです」と結んでいる。

（6）静岡母親毒殺未遂事件、奈良放火殺人事件

静岡母親毒殺未遂事件の概要について、矢幡（2006）は、「女子高生（当時16歳）が、劇薬のタリウムを少しずつ母親に摂取させ、毒殺しようとしたとして、静岡県警に殺人未遂容疑で逮捕された。このケースについては、女子高生という年齢もあり、ミロンが想定するような浮浪者めいた人生を送っているわけでもなく、反社会性パーソナリティ障害とよべるかどうか微妙である。だが、同時に、動物虐待の変形ともいえるような実験動物の死への一貫した関心があったりして、反社会性を感じさせるところもある。この女子高生の心理が描かれているものに、彼女のブログの記録がある。この女子高生のブログには、回避性パーソナリティの傾向は顕著に読みとることができる」と説明し、ブログ（なお彼女は、ブログの文章すべてで、『僕』を主語としている）を紹介している。そして、彼女のブログの中から、「そんな事は在りえないけれども、もし、一度だけ生まれ変われるとしたら、僕は植物になりたい。大きな喜びは無いけれど、代わりに深い悲しみもない。狡猾よく人を欺瞞しえる人間になれたらどんなに楽しいでしょうか、僕の演じることが出来るのはただ一つの役だけです。そう、観客。傍観者。群れに逸れた羊」「今度は僕が猫の役をやる。君は鼠をやってくれ。夜は狂喜。生き物を殺すという事、何かにナイフを突き立てる瞬間、柔らかな肉を引き裂く感触。生暖かい血の温度。漏れる吐息。す

べてが僕を慰めてくれる」「狼はトナカイを殺すが、同時にトナカイを強くする。狼が居なければ、群れ全体に弱さの毒が回り、やがてその群れは滅亡する。群れを破壊するのは僕。僕の周りの、僕以外の全ての人にオキシトシンを嗅がせたい」「グレヤム・ヤング毒殺日記 尊敬する人の伝記、彼は14歳で人を殺した」等を取り上げてその心理を分析し、「この母親毒殺未遂事件は、重大な少年事件のなかでも、最も酒鬼薔薇聖斗こと少年Aに近い特徴を持っている。まず本人が、少年Aのように、自分自身を奇形な人間と位置づけるような劣等感にさいなまれていること。同時に、それとは相反する、『冷酷な殺人を平然とやってみせる強者』という側面を持っているということ。次に、死に対する強い関心と、死を司る者にならんとする意思があり、自己の分裂感も強く、少年Aが『生きている実感が湧かなくてナイフで自分の手を傷つけてみた』と語ったような、自己の存在感の希薄さ、さらには、被害者に対する感情の欠落が見られる。この女子高生には、相手を死に至らしめることには性的な興奮がない点で決定的な違いがあるものの、両者とも分裂気質系に属する、奇妙な住人であるということではできるだろう」等と考察している。

一方、同じく親の殺害を試みた奈良放火殺人事件については、「母子3人が死亡した奈良県田原本町の医師宅火災で、放火と殺人容疑で逮捕された高校1年の長男（16）が田原本署警察本部の調べに対し、『ことあるごとに父親に殴られ、暴力が許せなかった』と供述していることが分かった。父親（47）が勉強部屋を『ICU（集中治療室）』と呼び、夜中まで付きっきりで長男に勉強を教えていたことも判明。捜査本部は父親とのあつれきが犯行につながった可能性が高いとみて調べている」等と、新聞において報道されている。

そして、この事件を精力的に取材した草薙（2007）は、この少年が、「パパにどうやって英語1の点数を説明しようかと思い悩んでいました。すると僕は、これまでパパから受けた嫌なことを思い出しました。パパの厳しい監視の下で勉強させられ、怒鳴られたり殴られたり蹴られたり、本をぶつけられたりお茶をかけられたりしたことを。なんでこんなに勉強させられなければならないんや。なんでパパからこんなに暴力を受けなければならないんや。一生懸命勉強してるやないか。何か方法を考えてパパを殺そう。パパを殺して僕も家出しよう。家出してから自分の人生をやり直そう——。僕はそう思うようになりました」等と供述していることを紹介し、放火殺人事件の背景に、日常的にくりかえされていた父親の暴力を指摘している。

さらにその上で、草薙（2007）は、精神鑑定人が「広汎性発達障害」と診断したこと、そして、裁判長が「少年は、（中略）高校入学後の最初の定期試験で平均点を大幅に下回る点数しかとれなかったという、

少年にとって誠に危機的な状況に陥ったことから、ついに不快な感情を抑えつけることができなくなり、実父に叱られずに済む方法として、『実父を殺害して家出する』ことを決意した。そして、それを実行する場面では、広汎性発達障害という少年の生来の特質による影響が強く現れ、放火という殺害手段を選択したり、殺害する相手がいないという現実に合わせて計画を変更できなかつたり、継母らの生命の危険に十分注意がおよばなかつたり、放火が犯罪であるということに全く注意を向けなかつたり、その場当たりの占有離脱物横領などの行為を重ねてしまったものである」等と、決定要旨で述べているのを紹介し、『『今度ウソをついたら殺す』と父親からしきりに言われていた。そして、少年は英語のテストは難しかったとウソをつき、さらに自分の得点が平均点より7点上であるとウソをついていた。少年の字義通り性によって、少年は本当に殺されると感じていたと考えられる。これは、日頃から受けている暴力とは次元を異にしている。またこういう場合、広汎性発達障害では、殺される前に殺さなければならないと考える傾向がある」等と、むすんでいる。

(7) 町田市女子高校生殺人事件、浅草レッサーパンダ殺人事件

町田市女子高校生殺人事件は、新聞記事によれば、「都立高校1年の女子生徒(15歳)が刺殺された事件で、逮捕された同校1年の男子生徒(16歳)と女子生徒は中学、高校を通じてとりたてて親しくしていた形跡はないことがわかった。男子生徒は動機について女子生徒が冷たくなったと話しているが、警視庁は男子生徒が一方向的に思いを募らせていたという見方を強めている。男子生徒が制服のまま凶器を持たずに女子生徒宅を訪ねている点にも着目し、殺害に至った経緯を調べている」等と報道されている。

最後に、成人の犯罪ではあるが、同じく女性を殺害した浅草レッサーパンダ殺人事件を紹介することしよう。この事件の概要について、村瀬(2006)は、「浅草レッサーパンダ事件と呼ばれる殺人事件は、2001年4月30日に起こった。犯人(当時29歳)は成人式を半年後に控えていた一人の娘さんをナイフで刺して殺害し逃亡した。当時から奇妙に思われていたのは、この犯人が『レッサーパンダの帽子』を被って凶行におよんでいた、ということだった。目撃証言から、この犯人は、たびたびこの目立つ『レッサーパンダの帽子』を被りながら、この浅草近辺を歩いていたらしい。そして事件後10日あまりたった5月10日、東京近辺の建設現場で働いていたところを、不審に思ったその会社社長からの連絡で、警察の取り調べを受け、逮捕された。ふだんからそんな目立つ『レッサーパン

ダの帽子』で歩き、そのままの格好で凶行に及ぶというのも変だったし、凶行に及んだ後も、遠くへ逃げるといってもなく、近辺の作業現場で働いていたのも妙なことであったが、その結果、犯人はすぐに捕まった。そして、その犯人の履歴がマスコミで紹介される中で、この青年が養護学校の卒業生であることが明らかになった。犯人は何らかの形で知的なおくれをもっているらしかった。そして裁判がはじまった」等と説明し、「小澤勲は、〈自閉症とは何か〉で、再三、彼らを『生活の中で見るべきだ』ということを訴えていた。私たち『先生』と呼ばれてきた者たちには、そういうことがなかなかできなかった。とうてい彼らを『生活の中で見つめる』余裕などなかったからだ。だからといって、彼らを『事例』や『症例』としてみなしていいわけではなかった。でも、そうしてすませるしかないのが現実だった。こうして、教師側に、こうした子どもたちへの『自閉』が起こる」「たぶん、『教師』が『自閉』的であることをもっとも感じていたのは、生徒である加害者の青年の方だったと思われる。なぜなら、彼は、自分が『養護学校』の卒業生であることをひた隠しにしていたし、自分を『障害者』と呼ばれることをとても嫌がっていたからである。おそらく、私たち教師側が規定しようとしている『障害者』というイメージと、その対象になる人たちが認めてほしがっている『おくれの自分』との間にはずいぶんな開きがあったのではないか。前者は『事例』や『症例』として現れる『障害者』であるが、後者は『生活者』としての『おくれるひと』にすぎなかったからである」「だから、本当を言えば、『学校』にいるときから、彼らの『広がる地図』のことを計算に入れた『教育』がもっと展開される必要があったのである。でも多くの教師は、彼らの『能力』を、『教室』や『プレイルーム』の中だけで理解できると思っていたところがある。それは間違いであり、そこには彼らを『子ども扱い』する『養護教育の間違い』や、教師の『思い上がり』があったと思う。彼らを『生活』の中で見る習慣がないと、実際に彼らは『学校の外(つまり生活の中)』では、どれだけの行動力をもっているのか、リアリティをもって想像することができないのである」等と述べている。

一方、佐藤(2005)は、「レッサーパンダの帽子だけならば、『へんなヤツだ』と周囲に笑われてすむことである。男の最大の過ちは、女性にわが意を伝えたいとき、包丁をちらつかせる、といつてもない愚かな方法を身につけてしまったことにあった。包丁やモデルガン、そうした武器を示すと、いつか、相手が自分の意になってくれる、とりあえずは従ってくれる。そのような愚かきわまりない誤解を学んでしまったことにあった。これが、男が『女をものにする』ために得たやり方だった。函館での事件(1994年7月

強制わいせつ・強盗未遂で懲役3年執行猶予5年。塗装店退職)の際に保護観察処分となったとき、『今回の犯罪行動に至ったのは、偶然にモデルガンを所持していたことが大きく、その偶然性がなかったならば、気弱な人であり、このような直接的な行動に出ることは難しかったと思われる』と指摘されている。なぜそんなことになったのか。どうしてこれまで、それがとんでもない間違いであると誰かが指摘してやる機会がなかったのか。あっても本人に直そうとする意志がなかったのか。「またこのとき、『危険な刃物を持ち歩かないこと』と注意されている。しかし『危険な刃物』と『包丁』が、男の中で一致していたかどうか。屁理屈のように聞こえてしまうかもしれないが、彼らは一般化、概念化において大きな弱さをもつ。逆に言えば、一般的な名称が、具体的事物へとつながらないことがある。包丁を持ち歩くな、と言われれば、理解するし守ることができる。しかし『危険な刃物』と言われたとき、それが具体的な事物を指さないことがままある。一般化や抽象化の理解における困難。このこともまた、彼らの大きな特徴である。いずれにしても、自分の意志を伝えるときに包丁をちらつかせる、この事件のもっとも大きな不運と不幸がここにあった。包丁などの凶器を持ち歩くこと自体が反社会的行動であり、犯罪である、その当然のことを男は学ぶ機会がなかった。むろん障害をもってしようといまいと、ほとんどの人はそんなことはしない。しかし教育の現場にいた私にとっては、このことは大変な盲点だった」等と述べている。

なお、この犯人は、養護学校時代から放浪癖があったことが指摘されているが、滝川(2004)は、この放浪や家出を『世界を味わう体験』なのではないかとし、「おくれをもつ子どもたちは、まだこのように観念の世界を自在に行き来することができません。そういう世界の獲得に遅れている子たちですから、頭のなかで観念的な世界を享受するのはまだ困難で、直接目の前にする実体の世界しかじゅうぶんに体験できないのです」「この子たちは観念の世界を移動するかわりに実際に身体を移動させねばなりません。それがこの子の世界とのかかわり方、世界の享受のしかたなのです。だから電車で遠くまで移動するのでしょう。車窓を流れる風景を高い感受性で飽くことなく楽しめます。次々と移り行く変わってゆく光景、さまざまな音の響き、ポイントの通過ごとに変化する揺れと震動——自分なりに世界を精一杯味わいつくそうとするこの子たちの姿が目には浮かばないでしょうか。かれらはそのためにもてる力を傾けます。こころに焼きつけてよく覚えています。必然性のあることなのです」等と述べている。

3. 少年犯罪から見えてくる研究課題

さて、枚数の制限のため、主な少年事件の紹介は終わり、石狩市主婦殺人事件などは次の機会にまわすこととし、次に、これらの事件について特別支援教育の観点からまず課題を整理してみることにしたい。

さて、これまでのところで紹介した識者の見解を参考にして、主な少年事件について事例研究し、社会、家庭(親子関係、夫婦関係など)、学校、司法、等のあり方について研究を重ねることが重要であるが、特に、以下の点について検討を深め、発達障害をとまなう非行少年への効果的なかわりの研究と社会的なネットワークづくりの実践が必要であると思われる。

①少年を犯罪に走らせないためのネットワークづくり。

子育て支援からはじまり、学校内での指導のあり方、児童相談所や警察など関係機関との連携のあり方、等を探り、早期発見による早期ケアのネットワークを確立すること。

②最近の少年犯罪と関連の深いインターネットなどに関して、モラルなどを習得させるプログラムの開発。

なお、この問題は、今回はふれることができなかったが、出会い系サイトなどの援助交際にからむ少年事件とも関連している。

③思春期の少年犯罪と関連の深い性の問題に関して、効果的な性教育のあり方や性に関して悩みを持つ少年へのケアのあり方について研究すること。

④非行少年に対する矯正教育のあり方について研究し、その成果を教員研修に生かして、教師がこれらの少年をケア出来る実践力を高めると同時に、問題徴候を早期に発見できる力量を高める。

4. 二次障害の防止、「怨み」を聞く回路づくりの重要性

さて、少年たちに犯罪をおこさせないために、教師に求められる実践力を要約すると、①いじめを早期に見抜き、適切な対応が出来る力、②思春期の少年の羞恥心や未熟な自尊心に配慮した声かけ(言葉かけ)ができる力、③少年がテストや試合などで挫折した時に歪んだ自己愛や自尊心におちいらないように適切にケアができる力、④危険を予兆している「日記」「作文」「絵」や動物虐待などに素早く気づく力、⑤過剰同調社会から生み出される「校則」等を吟味し、「真正の政治教育」を実践できる力、等があげられる。

それ故、教師は、これらの実践力を身につけるために、研修を受けたり、日頃の実践に対してスーパービジョンを受けたりして、実践力をつけていくことが必

要であると思われるが、その中でも、力をつけなければならないのは、「怨み」を聞きとれる力である。

この点について、河合（2003）は、これらの少年犯罪に関してまず考えるべき事として、「現在社会に対する怨みと攻撃性の強さ、そして、歪曲性」を指摘し「その怨みや復讐の念は、ある特定の個人に向けられたものではなく、社会全般に対するものである」「何も努力しないで『有名』になる安易な方法は、悪いことをして新聞に載ることである。マスコミが騒ぐほどその人は喜ぶわけである」「犯罪はその社会の影の部分であり、それによって、影の側から見た社会の姿を露呈する働きを持っている」等と分析し、「このような恐ろしい犯罪を生み出した社会に生きるわれわれは不運や不幸が重なり合った人の声が、正当な道筋を通して一般の人に達するような機構をちゃんと持っているかについて反省する必要がある。競争競争で、ただ強い者が勝つというだけの社会は、まったく思いがけない歪んだ形で反作用を受けてしまう」と考察している。それ故、教師は、「学校」という社会の中において、「怨み」を聞く回路づくりを日頃の教育実践の中においても心がけることが大切である。また、「怨み」を聞く回路づくりの訓練を受けてきているスクールカウンセラー（臨床心理士）と積極的に連携をとって、心に深い傷をもって非行や犯罪へと駆り立てられてしまう児童・生徒への教育にあたることが望まれる。

5. 『舞台』としての学校のあり方

さて、次に、佐世保小6同級生殺害事件、寝屋川教師殺人事件、そして、少年犯罪元年ともいえる神戸小学生殺人事件、等の不可解な少年犯罪の『舞台』として学校が選ばれるのではなくて、学校がこれらの少年たちにとって楽しい『舞台』として存在するために、教師は何を心がければよいかについて考えてみたい。

山口（1988）は、「遊びのいちばん大切なところは遊んでいるうちに人間はふと気がおかしくなって、今まで考えなかったことをすることです。それは新しい可能性があるということです」と指摘し、「私が中学校の先生をやっているときから今まで、『大学の先生に比べて中学校の先生は、程度の低い子供を相手にしている』という見方がどうも一般的です。ところが、事情はずいぶんちがってきているのではないのでしょうか。むしろ今日、子供と接する時間の多い人間は、可能性をよけい持つことになる。『森林浴』といった言葉のように『子供浴』みたいなことを経験しているところがある。だから、子供と接している時間の多い人は、人間の新しい可能性を探る先兵になる」と問題提起し、「私は、そういう子供を包み込む空間である学校は、劇場であるべきだと思っています。しかし、今

の学校は劇場とはとうていいえません。私のいう意味は、人と人とのぶつかり合い、異質の物のぶつかり合いのあるところを劇場と呼びます」「芭蕉にならうといえば、これまでの学校は『不易』の部分が強調され過ぎていた。『流行』の部分をかき取り入れるか、『逸脱』をどう取り込んでいくかが、これからの学校の非常に大きな問題でもある」「子供にいろいろなことを伝える一方、逆に子供から何かを吸収することによって、新しいタイプの人間になっていく可能性が十分に考えられる」等と考察している。

一方、河合（2003）は、『いじめ根絶論』を省み、「いじめをなくする一番よい方法は、『いじめ』のことにせつかちに対処するのではなく、子どもたちに伸び伸びとした楽しい生活を準備することである。なんとかしていじめをなくそうとか、見つけだそうと頑張るのではなく、子どもたちがリラックスできる状態をつくりだしていく、親や教育者の温かい姿勢が大切なのである」「子どもたちが『やり切れない』、『むかつく』状況をつくっておき、まるで、いじめをせざるを得ないような状況に追い込んでおきながら、いくら『いじめの根絶』を叫んでも無理というものである」「いじめを無くすることは大切なことである。しかしそれを無くそうと肩に力を入れるのではなく、むしろ肩の力を抜いて、『いったい自分は、子どもたちが自由に楽しく生きていくために、どれほどのことをしているだろう』とか、『子どもたちと一緒に楽しい時間をどれほど過ごしているだろう』とかいようなことを、それぞれの大人が考え直してみる必要があるのではなかろうか」等と述べている。

これらの考えを考慮しながら、教師たちが日々の教育を実践することが、特別支援教育にもつながると思われる。

6. 性教育の重要性

さて、次に、長崎男児殺害事件、町田市女子高校生殺人事件、浅草レッサーパンダ殺人事件、などから浮かび上がってきた性教育の問題について考えてみることにしよう。アスペルガー障害に対しては、どのような性教育が望まれるのであろうか。

この問題に対して、福島（2005）は、「長崎事件から見えてくる今の日本の子どもの＜性の病理＞に対するには、社会システムの抜本的な変革が必要のように思われる。まず、第1に、子どもたちが人間性の自然である性の問題について、自分で行動決定ができるような実践的な性教育を充実させる必要がある（インフォームド・セクシャル・デジジョンの育成）。なお、親や教師による性教育に限らず、この情報社会においては、子どもたちに対してもあらゆるメディアが提供する性情報・性表現を制限することなく、広い範

困の情報源を惜しみなく解放する必要がある。少年の〈男性性器に対する病的な関心〉という『症状』が強い病巣となったのは、アダルトビデオやインターネットにおいてすら、成人男女の性器も少年少女の性器もはっきりと見ることができないという状況があったからこそである。性教育テキストや家庭医学書に、人間の身体の一部である性器の適切なイラストなり写真なりが掲載されていさえすれば、その種の強迫観念が起こる温床はたちまち雲散霧消するはずである」

「第2に、日本でも、人間性の自然にもとづいて少年少女の性行動を肯定し、これを積極的に支援する社会に変化する必要がある」「第3に、現在の法律や条例で定められているわいせつ概念を抹消し、さらに『未成年者は非-性的な無垢・無邪気な存在である』という神話から解放されて、人間性の自然に率直にしたがった児童観を確立する必要がある」等と提言している。

福島島の提言に対して、読者は、「過激すぎる」と思われるかもしれないが、先入観にしばられることなく真摯に検討する必要があるのではないだろうか。

また、寝屋川教師殺人事件、町田市女子高校生殺人事件、浅草レッサーパンダ殺人、等の少年にみられるように、性的衝動のコントロールや異性とのつき合い方に関する対人コミュニケーションスキルの欠如を考慮すると、これらを視野に入れた性教育も望まれる。

この点について、アスペルガー障害と性犯罪事例について研究した藤川（2006）は、「犯罪事例の大半が未診断であった」ことを指摘し、「ふつうならば暗黙のうちに了解できる性行動上のルールを、彼等に対しては、わざわざ教えなければならない」「性犯罪に及んだアスペルガー障害の青少年の行動をよくみると、もともと相手の合意を得ることに関心がない。つまり、『相手の合意』という事象を理解しない、というところに問題があった」「このようにみえると、性犯罪を犯す少年には、合意のない性行動がどれほど相手を怒らせ、傷つけるかを繰り返し教えるだけでなく、事例に応じて具体的な禁止事項をもうける必要がある」等と、考察している。

一方、アスペルガー障害であることを自己開示しているルーク・ジャクソン（2005）は、「ルールといえば、AS（アスペルガー症候群）のティーンのみんなは、人とつきあうときのふるまいかたのルールって教わったことがあるよね？ほら、こんなやつだよ。言われたことあるでしょ？『よその人に抱きついたり、さわったりしてはいけないよ。さわっていいのは、おうちの人か、きちんと申し込んでおつきあいしている恋人、それも、そういうことをしていいっておたがい納得しているときだけだよ』まあ、聞いたことがなかった人も、いま、これで知ったわけだよね」

「さて、ここまでは前置き。問題はここからだよ。十

代の子は、仲のいい男の子ばかり、あるいは女の子ばかりで群がっているときは、思春期特有の儀式を実行しなきゃならない。そのときは、ぼくらが習ったようなお付き合いのルールはどっかへ消えちゃうものらしいよ。ぼくたちって、なんて奇っ怪な世界に住んでるんだろう！ともあれ、ぼくの結論はこう。とにかく、教わったルールをきっちり守ろうよ。ほかの子がいくらルールを破っても、そんなこと気にせずに、無視すればいいと思うんだ」と述べたり、〈デートのときにした方がいいこと、してはいけないこと〉について、「もしも相手に『私、これだとお尻大きく見えない？』とか『このワンピース、いまいち自信ないんだ』とか聞かれたら、それは『ほめことばを釣る』って言って、そんなことはないよって言わせるためのテクニックなんだ。これはものすごくわかりづらい。でもね、ぼくの習ったところでは、正直に『うん、大きく見えるね』って言うより、『そんなこと言わない言わない、すごくすてきだよ』とかそんなふうにかたえる方が礼儀に合ってるんだって。こう言ったからって、うそをついたことにはならない」「初めてのデートのあとで、相手の子がきみを気に入らなくて、もうおつき合いはやめようと言いつつもかもしれない。いや何回もデートしたあとでだって、そういうことはある。でも、それは、その人が決めること。相手しだいだから、こっちにはどうしようもないんだって納得することにしよう」等と述べ、異性とのつき合い方について一生懸命に学ぼうとしている。

このように、アスペルガー障害の子どもの声にしっかりと耳を澄まし、彼らの気持ちを理解しながら、具体的な指導をきめ細やかにすることが重要であると思われる。

7. 特別支援教育の重要性

さて、これまでのところで考察してきたように、「子どもたちが学校で、自由に楽しく生きていくこと」を実現するためにも、特別支援教育が重要であることを指摘しておきたい。

藤川（2007）は、これらの点について、「特別支援教育を成功させるために、文部科学省が取り組むべきことや現場の教師が努力することはたくさんありますが、具体的な工夫をするときにいちばん大切なのは、『発達障害をもつ子どもたちこそが、いちばん困っている』という事実を理解しておくことです。何がどうなっているのかわからなくて、自分の行動がどうして周囲のみんなとかみあわないのかが本人にはわからない、という大変さに共感する姿勢がなければ、どういう施策もうまくいきません。ですから、特別支援教育は個別性の高いものになるはずで、発達障害をもつ子ども一人ひとりに、『あなたの今のこの行動が周囲

に理解されなかったのは、こういう理由だったのだ』ということを適切に伝えることが、前提としてとても大事です」等と説明し、「PDDに理解と支援がなければ、ときには反社会的行為が起こってしまうという事実を率直に認め、だからこそ、社会の側がこの障害を適切に理解し、支援する態勢をつくることが重要だという議論につなげていく必要がある、と私は思うのです。ADHDは、アスペルガー障害が少年犯罪で話題になる以前から、いわゆる『学級崩壊』の犯人のように名指しされることがありました。しかし、このADHDについても、この障害が学級を崩壊させるのではなくて、理解と支援のなさが本人をめぐる環境を混乱させているだけであると考えて、具体策を講じていく必要があるように思います。アスペルガー障害とADHDを考えると、かたや犯罪、かたや学級崩壊と、デビューの仕方としてはろくでもないかたちですが、しかし、せっかく社会に認識されるようになったのですから、誤解があればそれを解いて、適切な支援が得られるように理解を求めていくことが大事だと思っています」等と、提言している。

一方、発達障害という視点を初めて取り入れて矯正教育を実践している少年院を3年間にわたり取材した品川(2007)は、「少年の中には『ゴミ箱捨ててきて』と教官に言われて、ゴミ箱そのものをゴミ袋に入れて捨てようとする子もいます。そもそも少年院に入ってくる少年たちには、メタ認知が弱い、セルフ・エスティームが低い、セルフ・モニタリング力やセルフ・コントロールが弱い、言語・非言語を含むコミュニケーション力が弱いといった課題が共通します。これらを克服するツールとして発達的な視点を視野に入れたマネジメント方法を構築し、個別処遇は言うまでもなく集団指導にも導入したのです」と説明し、「『なかには発達的な課題をもつ子もいる』という視点が指導する側になれば、たとえばこうやってゴミ袋の中にゴミ箱を入れてしまうような行為はふざけているだけだと受け取られ、叱責されるだけです。メタ認知が弱い少年たちはそういう経験を家庭や学校で繰り返してきています。ですから、当少年院では少年たちに認知や学習スタイルの偏り、不適切な環境から誤学習していたり未学習だったりということを視野に入れ、犯罪学、社会学等エビデンスベースのプログラムを開発し指導実践しています」等と述べている。また、少年院内の集会室に貼り出されている正誤学習について、「人間は嘘をつくようになる。借りたものは返さなくてもいい。いじめに誘われたら参加する。学校の授業はサボってもいい。やられたらやり返す。お金は使わなければ入ってこない。デザートを先に食べてもいい。恐喝の仕方。シンナーの吸い方……これらは全部『友人から教えられたこと』という項目の中に書かれています。こうやって書き出してみると、本当

にいろいろなことを誤学習しているのね。それも友人関係からが多いと言うことが象徴的ですね。でも、話し合うことでこうやって望ましい道徳観、倫理観に到達しているのはすばらしいことではないでしょうか…」等と述べている。

また、ニキ・リンコ(2007)と対談した浅見は、「そういう脳の特徴を持った人に、『人の気持ちがわかるようになれ』って言うのは、足の不自由な人に歩けって言うようなものなのかもしれないと思うようになった。そして、自閉っ子はこういう認知の穴を埋め合わせるために、『忘れない脳』を持っているのかもしれない。なんで殺人がいけないかを教えようとするとき、精神論で語ろうとするじゃないですか。でも、『この国で生活する以上は、人を殺してはいけないというのは他のルールより強いルール』って説明すれば一発でわかるのと思うんです。それで自閉っ子は、納得すればやらないですよ。なんでも辞書みたいに解説してあると、わかりやすいですよ」等と述べている。

これらを参考にしながら、教師たちが日々の実践の中で、きめ細やかな特別支援教育を行われることを期待したい。

【文献】

- 安藤 要(2007): ADHDと非行行動の関連 — 家族関係の視点から — 心理臨床学研究 9 愛知学院大学 19-30
- 別府悦子他(2007): アスペルガー症候群と特別支援教育 精神療法33(4) 金剛出版 448-454
- 江口昇勇(2007): 軽度発達障害がからむ危機介入の事例 — 学校査定とコンサルテーションの実際 — 心理臨床学研究 7・8 愛知学院大学 17-27
- 藤井誠二(2000): 17歳の殺人者. ワニブックス
- 藤川洋子(2005): 特異な非行とアスペルガー障害 — 司法機関における処遇例 — 臨床精神医学34(9) 1335-1342
- 藤川洋子(2006): アスペルガー障害と性犯罪 石川元編 アスペルガー症候群を究めるⅡ 至文堂 75-81
- 藤川洋子(2007): なぜ特別支援教育か — 非行を通して見えるもの — 日本標準
- 福島 章他(2003): 十二歳の犯罪をどう考えるか — 長崎男児殺害事件から考える — 金子書房 2-13 児童心理別冊, 57(17)
- 福島 章(2005): 子どもを殺す子どもたち 河出書房新社
- 井上敏明(2007): 刑事裁判における「アスペルガー症候群」の診断を巡って — 裁判員制度を目前にした司法の臨床心理学的視点導入の提言 — 芦屋大

- 学論文叢46号 特集「アスペルガー研究Ⅰ」 9-54
- 井上敏明 (2007) : 「発達障害と刑事裁判」— 高機能自閉 (アスペルガー症候群) を中核とした奇異な犯罪心理の新しい見方の考察 — 芦屋大学論文叢49号 特集「アスペルガー研究Ⅱ」 7-53
- ルーク・ジャクソン (2007) : 青年期のアスペルガー症候群 ニキ・リンコ訳 スペクトラム社
- 門 真一郎 (2001) : アスペルガー症候群に理解を 朝日新聞 1月19日朝刊
- 神谷信行 (2007) : アスペルガー症候群の司法事例 — 弁護士の立場から — 精神療法33 (4) 金剛出版 455-460
- 工藤・宮崎 (2005) : 執拗に放火を繰り返したアスペルガー症候群の精神鑑定例 臨床精神医学34 (9) 1351-1357
- 柿沼・永野 (2005) : 学校の中の事件と犯罪③ 批評社
- 河合隼雄 (2003) : 縦糸横糸 新潮社 63-66
 (「怨み」を聞く回路—神戸・小学生殺害事件の周辺)
- 草薙厚子 (2007) : 僕はパパを殺すことに決めた — 奈良エリート少年自宅放火事件の事実 — 講談社
- 車谷隆宏 (2006) : アスペルガー障害の非行事例 石川元編 アスペルガー症候群を究めるⅡ 至文堂 69-74
- 町澤静夫 (2000) : 佐賀バスジャック事件の警告 — 孤立する家族, 壊れた17歳 — マガジンハウス
- 鶴川雄大 (2007) : アスペルガーとしての苦難の歴史 精神療法33 (4) 金剛出版 468-472
- 村瀬 学 (2006) : 自閉症 — これまでの見解に異議あり! — ちくま書房
- ニキ・リンコ (2007) : 自閉っ子におけるモンダイな想像力 花風社
- 小此木啓吾 (2000) : 「ケータイ・ネット人間」の精神分析 飛鳥新社
- 尾崎ミオ (2007) : アスペルガー症候群などの発達障害の子どもといじめ 児童心理6 (5) 金子書房 114-119
- 佐藤幹夫 (2005) : 自閉症裁判 — レッサーパンダ帽男の「罪と罰」 — 洋泉社
- 佐藤幹夫 (2007) : 裁かれた罪 裁かれなかった「こころ」 — 17歳の自閉症裁判 — 岩波書店
- 芹沢・高岡 (2004) : 殺し殺されることの彼方 雲母書房
- 品川裕香 (2005) : 心からのごめんなさい — 一人ひとりの個性に合わせた教育を導入した少年院の挑戦 — 中央法規
- 品川裕香 (2007) : 輝きMAX! すべての子どもが伸びる特別支援教育 金子書房
- 高森明 (2007) : アスペルガー当事者が語る特別支援教育 金子書房
- 高岡健 (2007) : アスペルガー症候群と反社会的行動 — 司法事例から — 精神療法33 (4) 金剛出版 462-467
- 滝川一廣 (2004) : 「こころ」の本質とは何か ちくま親書
- 玉井正明・玉井康之 (2002) : 少年の凶悪犯罪・問題行動はなぜ起きるのか ぎょうせい
- 月崎映央 (2001) : 「少女監禁」と「バスジャック」 — マスコミ報道と精神医療 — 宝島社新書
- 鳥塚通弘ほか (2005) : 司法事例化したアスペルガー症候群が疑われる1症例 臨床精神医学34 (9) 1271-1278
- 矢幡洋 (2006) : 平気で他人の心を踏みにじる人々 春秋社
- 山口昌男 (1988) : 学校という舞台 — いじめ・挫折からの脱出 — 講談社
- 山本加奈子他 (2004) : 反社会的行動を繰り返す青年期アスペルガー障害者の心理アセスメントに関する事例報告 愛媛大学教育実践総合センター紀要25 137-148
- 山中康裕 (2003) : 少年の心 中日新聞 8月19日刊
- Woodsj (2003) : Boys Who Have Abused. Jessica Kingsley Publishers
- (付記)
 本論文の作成に際しては、前半は、生島博之が執筆し、後半は教育実践総合センター研究協力員の岩田郁子が主に執筆した。